お菓子のおもいで

越路吹雪

呑んべえになった所為ばかりではないが、私は最近、お菓子というものを殆んど食べない。

お菓子を食べる暇がないのだというと、嘘のようだが、これも本当だから仕方がない。

そのショーコに、宝塚歌劇の舞台に出ていた頃や、外国の旅の間は、ちゃんとお菓子を食べている。

お菓子党ではないので、あまり味覚に自信はないが、私は、和菓子は関西、洋菓子は東京が美味しいような気がする。関西の和菓子の味は、東京と比べて、甘味が淡く、ふっくりと味のきめが、こまかい。宝塚時代には、楽屋に野立ての茶道具を持込んで、抹茶を点てながらお菓子をつまんだりして楽しんだが、皆でわずかなお小遣いを出し合って買う、宝塚の草餅や、うぐいす餅も本当に美味しかった。

売りに歩いているのを、いたづらに呼びとめて食べた。わらびもちや、みたらし団子も、なつかしい、ひなびた味であった。貰って楽しかったお菓子に、名古屋の「おちょぼ」というのがある。

四角い桝のような白木の箱に、お砂糖を小さく堅めたような小粒のお菓子が入っていて、その一つ一つが和紙に包んで、ひねってある。そして、お砂糖の粒の先きが、いずれも紅をさしたように紅く染めてあって、なんとも可憐な、美しいお菓子であった。

東京のかりんとうが大阪ではオランダ、おせんべいがおかき、お祭りの電気あめが綿菓子と、東西で呼び名がちがい、きんつばが東京のは丸く、神戸のは四角いのも面白い。

四谷の実家の側に、鯛焼きの美味しいのがあって、歌の稽古などしていると、母が、よく買ってきてくれたが、子供の時とちがって、一尾は、もう、とても食べ切れなかった。

大人になると、子供の頃のようにお菓子で食欲を充たすということが殆んどなくなる代り、仕事のあとでホッと、くつろぎ乍ら、お茶とお菓子で疲れをやすめ、気をまぎらせる楽しみが生れる。

それなればこそ、あわただしい都会の真ン中に、ワンサと喫茶店が出来るのだろう。

先年、オーストラリヤに行って仕事をしていた時は、日本とちがって楽屋でお腹が空いても、おそばなど食べるわけにはいかず、仕方がないので、お菓子を買って行っては、楽屋で食べていた。夜おそく帰るホテルも、とっくに食事時間をすぎているので、これもお菓子で気をまぎらすのだが、深夜、異国のホテルで、ひとりモソモソとお菓子を食べるのなどは、あまり楽しいものではない。

最近、知人のA氏のお宅で、京都から作りたてが今とどいたばかりという、生麩のお饅頭を御馳走になったが、中にさっぱりと、あまい、あんが入っていて、薄緑の生麩の味もやわらかく、包んだ木の葉をはがしながら食べる味は、京都ならでは美事なものであった。

洋菓子は出来るだけ味も姿もバタくさいもの、和菓子は出来る限り品よく美しく、眺めただけで心の和むようなものを、私は食べたいと思う。

（女　優）